

第10回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第10回「文芸思潮」現代詩賞

第一〇回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで今年も日本全国および海外から四七二名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に締め切らせていただきました応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、九月二三日、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今回特に佳作レベルの層に作品が多く集まったことから、昨年ひき続き「佳作」「入選」としてより幅広く顕彰することにいたしました。

奨励賞および佳作の作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がたくさんありますので、それらの作品も、できるだけ「文芸思潮」ウェブおよびインターネット誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

現代詩賞の授賞式は、銀華文学賞、エッセイ賞、イラスト・漫画賞と併せて、明年二〇一五年二月一日（日曜日）午後二時より東京都大田区下丸子の大田区民プラザで行なう予定です。受賞者以外の方も御参加できますので、親睦を兼ねて、お誘いの上ぜひ御来場ください。
第十一回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

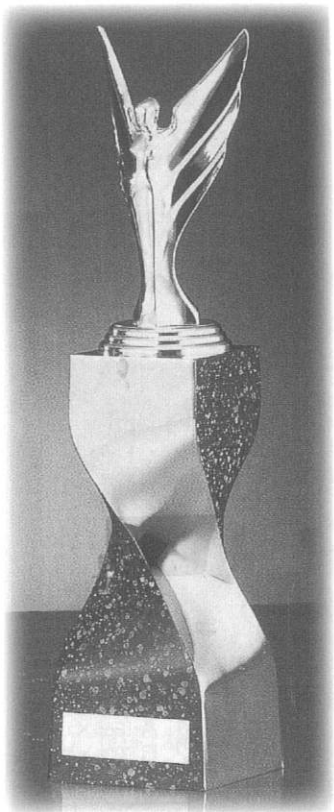
「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

最優秀賞

「花」^{きぬぎぬ}「衣衣」

「星待ち—カムアウト—」

日疋士郎^{ひびき}（神奈川県相模原市）



優秀賞

「くだもの」「朝を告げる」「漂流」

青木由弥子（東京都大田区）

「アンドロメダ農夫」

なないろ（岡山県津山市）

「休耕田」

上田 勝（千葉県いすみ市）

「常世の実からの伝言」「命からかたとん」

後藤 順（岐阜県岐阜市）

奨励賞

「旅の途中」「晩秋」「東京の空」

遠藤芳子（東京都狛江市）

「白い心」「月光」

麻生ゆり（福岡県北九州市）

「神経質な果実」「死児のための玩具」「喰らう」

舟橋空兔（愛知県尾張旭市）

「Rabbitは感傷的に」「見つかりやすいウォーリー」

「若年性がん患者の結婚について」

nullcha 森田有紀（福岡県福岡市）

「死体をタクシーに乗せて」「幼年時代」

「オレ、正義のレスラー、エル・テキエーロ」

後藤大祐（兵庫県西宮市）

「ペリカン」「青黒く」「口」

草野理恵子（神奈川県横浜市）

「カエルのお告げ」「小さな通り道 懐かしい木通

を除いたすべての色が 白黒写真のように無彩色で

彩られました」 柴田実可子（東京都北区）

「遺書」「ステロイド／寄生」

深町秋乃（熊本県熊本市）

「石へのプロット」「化生」「毀れていく」

大西久代（大阪府豊中市）

「青いひまわり」「海を黙らせたのが私」「母へ飛べ」

merongree（神奈川県川崎市）

「軸、あるいは道しるべ」「震度6弱」

町田理樹（大阪府大阪市）

「花の終わりの暴風雨」

浅見龍之介（埼玉県草加市）

「煙ことば／踊ことば」

齊藤智仁（北海道札幌市）

選評



松尾真由美 まつお まゆみ

1961 北海道生まれ
詩集『燭花』（思潮社）
詩集『密約—オブリガート』（思潮社）で
第52回H氏賞受賞
詩集は他に『揺籃期—メッサ・ヴォーチェ』
『彩管譜—コンチェルティーノ』『睡藍』
『不完全協和音 consonanza imperfetta』
『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊
のはらかな記憶を』（すべて思潮社刊）
BOX詩集個展用パンフレット詩集
『装飾期、箱の中のひろやかな物語を』
現代詩文庫『松尾真由美詩集』（思潮社）
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）
『小野十三郎を読む』（思潮社）『短篇集
夜』（驢馬出版）『ふるさと文学さんぽ
北海道』（大和書房）
北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員

詩の言葉を自分のものに

松尾真由美

詩の言葉によって自己を解放していく、今回の選考では、これが出来ている作品が多いように思われた。作品の完成度を問う以前の問題だが、読者が心地良く受けいれることが出来る詩は、まずは作者が言葉を信じて、それに寄りそい、自分なりの感性や感覚を解き放つていくことで、書く主体の本来の姿が読者に見える。また、作者が信じた言葉は読者も信じられる。どのような世界が描かれていようと、これがあれば、作者と読者は通じあえる。

たとえば、詩的なるもの、となれば定義は怖ろしく広くなる。空や風などの自然から感受するもの、小説や哲学などからも詩的感興は呼び起こされ、美術や映画などから詩を感じることもある。日常から逸れる感覚はすべて詩的と名づけられるだろう。詩の初心者陥りやすいのは、この外からの刺激で詩が書かれていると考えていることだ。確かにそういうことも稀にはある。実作を続けていけば分かることだが、本人に内発的なものがなければ、外からの刺激は降りてこない。むしろ、外の刺激は深淺を加えずにさまざまなモチーフとして作用することが多く、詩の内発力は生きる上での違和感や齟齬感などであって、生の肯定性とはほど遠い。だからこそ、詩の言葉を信じて感受した世界を広げなければならぬのだ。自己を解き放つということは、詩の言葉（新たな触手）で新たな世界を構築するということである。そこに作者の救いがあり、その世界を共有することで読者もまた救われる。

当選作の日正士郎氏の「花」は、実験的なひらがな表記が詩的成熟と相俟っていることに感心した。句読点のないひらがな表記は読みづらさげ印象を与えるが、流れるような語感を駆使して、言葉のリズムで読ませる。これは作者の身体と言葉が一体となっている証左であり、特異な表記に必然性を感じられる。また、このひらがな表記ゆえに古語と現代語が入り混じり、通常の言語体系の破壊が行なわれ、破壊は表記だけに留まらず、主体の内奥に及んでいる。だから主語の「ぼく」が「おれ」に変容しても自然さはない。言語の破壊から始まって、新たな触手で新たな世界を構築する。詩の言葉でなければ出来ないことをやってのけた感がある。

優秀賞のなないろ氏の「アンドロメダ農夫」は、一行ずつの言葉の流れの中に詩的飛躍がこめられている。弛緩がなく、ハードなところで自身と対峙しているが、白菜やトマト、コーンフレークなど身近なものが出てくることで観念に溺れず、詩的なものトリアルなもの交差が作者独特の個性となっている。あと、括弧の使い方が、一連目は問題ないが、（オルタナティブは）居場所がない）の方はあってもなくてもいいもの。それならなくてもいい。詩の世界が崩れてしまう危険があるので、こうしたことには充分注意深くしてほしい。

優秀賞の上田勝氏の「休耕田」は、作者の年齢にこだわるわけではないが、言葉の運動が若々しくて驚かされた。軽やかに過ぎてゆくものに焦点を合わせたことで、言葉に軽やかさが生まれ、擬音（扱うのはむずかしい）の多用も軽やかに成功している。その軽やかさの中でいくつかの悲哀がさり気なく差し込まれ、死を伴っている影法師のイメージも淡く濃い。完成

佳作

- 「被施魔法（魔法をかけられて）」 「梦想的水母（夢みたクラゲ）」 金 泉碧
- 「面影」 「頭蓋骨」 「唾棄」 大山日文
- 「by 裏ボス」 「蒼の射す序曲」 「もーつあるとぼんでみつく」 榊 一威
- 「箱庭のある部屋」 「小舟の便り」 「幻想細胞」 日野笙子
- 「春の行く手」 「楳円の邂逅」 「骨の居場所」 花潜 幸
- 「まんぼう」 「ハシブト鴉」 「金網」 滝野澤 弘
- 「リサイクル TOY」 川上 明美
- 「未完の答」 「容赦なく」 「鳥瞰の果て」 大山 元
- 「重解1.2.3」 優谷明広
- 「日常」 「社会」 「そして生きていく」 鳥羽アザミ
- 「散歩 街の小景」 佐藤清助
- 「ホラ吹き、旅に出る。」 「アルパチーノとデ・ニーロと、刃物と少年」 「朔」 菊池智弘
- 「タクト」 「追悼。もしくはつぶやく断片」 「歴史」 小池陽慈
- 「塩の川」 「ワイルド・フラワー」 マグ・マグロウ
- 「砕氷船」 「うそつき」 「風船」 八木真央
- 「銀杏」 「母の写真」 「夜から朝へ」 氷田すが子
- 「蠟燭に火を」 「夢幻」 十路田道広
- 「臯月呆休」 「ういるす」 「丘」 結城ネギ
- 「未完の情婦」 仔柴 健
- 「原点」 「八月の詩」 「切り裂きジャックの証」 谷村 光
- 「産土神」 「楢山」 山口理々子
- 「北八」 清水一美
- 「名前の柔らかい死」 「セシオン層にて」 「恋」 宇佐美明史
- 「足の女」 「女の足」 庵堂ナユタ
- 「十六夜」 「娘」 五十月 彩
- 「お迎え」 「お呪い」 新垣汎子
- 「デパート」 「帰郷」 「謝罪」 峰村亜由美
- 「流点」 「午後の原理」 「□（しかく）」 滝川 閑
- 「青い太陽」 「春を待つひと」 「或る死」 齊藤俊介

度の高い作品である。

優秀賞の後藤順氏の「命からかたとん」はまずタイトルに惹かれた。内容は幼い弟を死なせてしまった兄の苦渋が、できるだけ省略されて表現され、構成に難はあるが胸を突かれた。作品のまとまりとしては「常世の実からの伝言」の方が良かったが、未決囚という自覚のもとで死者を長年思う気持ちから「からから かたかた とんとん」と詩的に昇華している。これからも続く罪の意識が一瞬消える。詩の力の効用を感じさせた。

優秀賞の青木由弥子氏の「朝を告げる」は、大きなものをつかもうとする意志に好感が持てた。現実からの多大な飛躍は詩の特色といえるものだが、出だしの良さは鳥のイメージを受けとめられ、それゆえ、地と空の対比は説得力があるが、海まで出さない方がいい。作品が大雑把な印象になる。イメージをつかんだら、それを丹念に追うことも必要である。空、地、太

陽、海などの言葉はそれだけで対応関係にあるように感じられるが、空にしろ、海にしろ、さまざまな観念や思想が入っていて一語だけで大きな意味を内包する。それに応じた描写力は意識的になれば身につくはずだ。

奨励賞の後藤大祐氏の「死体をタクシーに乗せて」は、饒舌さと詩の展開が絶妙に絡まり合っており、時空の交錯が上手くまとまっている。タクシーに乗車中のボクは上機嫌を装って、旧時代の亡霊を呼びこみ、父や兄、陸軍、重戦車や十字軍も、コインランドリーやファストフード店と同列に並べられる。上機嫌を装うことで時空を攪乱しているのだ。実際は死体に話しかけるボクも死に近くにいる者であって、それゆえ、作者にとっての死語がいよいよと喚びされ、資本主義や全体主義という言葉も死語のように軽やかに位置される。しかし、作品全体のトーンは軽くはない。書く主体が軽薄ではないからだ。この作品では主体というものを改めて考えさせられた。詩を書く主体というのは作者であって作者でない者のことである。詩は無意識の領域からも言葉が生成される。それは本人の預かり知らぬところから発せられ、ゆえに私は作者とは違う書く主体という言葉を使うのだが、その主体は中空にいるようで、不確定な者である。意図的であるかどうかは分からないが、後藤氏は死体と会話できる者として主体を死者の世界にいる者にして、作品を構築した。非常に興味深い作品だった。

奨励賞の町田理樹氏の「深度6弱」は、話し言葉が想像力を飛躍させている。家具の擬人化など難なくこなして、物事に対しての辛辣さも出しきっている。ここまで書いて作品に破綻がないのは、人の存在意義を問うことに深さがあるからだ。深度6弱の意味がここにある。

奨励賞のmeronfree氏の「母へ飛べ」は、絶望や諦念を漂わせながら、親子の絆の深い振れを描ききっている。他の2篇に比べると短い作品だが、その分、視点が定まっただけで胸に迫る。他の2篇は整理が必要。筆力のある作者なので、一行の言葉の長さをまちまちにせず、たとえば「青いひまわり」の終連、終連から2連目のような書き方で、作品を丁寧に仕上げることを意識してはどうか。

奨励賞の麻生ゆり氏の「月光」は、無理なく素直に眠りへの恐れのが感覚が表れる。物語の主人公のような女の子の出現に説得力があるのは、そのときの夜の風情が月とともにしっかりと描かれているからだ。読者に見えるような光景が作品の力となる。

入選

- 「宝石」 「あなたの為に」 「癒しのメザシ」 山本 薫
- 「Heavy Ocean's RAIN」 「夏の太陽」 「火曜の朝」 上野勝己
- 「燻ぶる感覚行法となんくせの仮面獅子」 早川和克
- 「順路」 関根裕治
- 「サイレント・デー1」 「サイレント・デー2」 「サイレント・デー3」 風守
- 「目玉のイタい話」 「脳内とり扱い説明書」 伊藤ひかり
- 「石碑」 小笠原 新
- 「風と共に」 十七団
- 「生きている人」 本田初美
- 「鞆」 「薔薇園」 「暇」 三田村正彦
- 「朱の小夜曲」 「砂の記憶」 藤原 榮ルビ
- 「おてんきあめさん」 「なみだ ひとつぶ」 「らくがん」 今田真理子
- 「至福の薔薇よ香れ」 「人生は？ 生死さえも花びらの紙一重」 西條由美子
- 「オマージュ」 藤木由紗
- 「魔宮」 「美しい城」 「生きる」 上田康宏
- 「黒い海を泳いだ子供の頃の記憶」 「壁」 「シャボン玉」 河島陽子
- 「理不尽な殺人者の愛を知るテグテ」 「小指の制御」 「川」 栗栖じゅん
- 「バズル」 「トロッコ列車」 「Room29.5」 火野桜子
- 「ミネラルウォーター」 「連結」 「呼吸のあいだ」 堺 俊明
- 「おもるところ」 「春」 「しじまに」 橋 鮎
- 「常夏の夢」 「日の光の下の葉」 原田文人
- 「言葉の光」 「子宮を遡る旅」 「レントゲンと積み木」 村上文緒
- 「合理化」 「俺へ」 「メサイアはお前」 立山 紘
- 「カヨウサンシヤ」 「コンペキミドリ」 LULU

奨励賞の深町秋乃氏の「遺書」は、色彩感覚を重点においていることで言葉の流れとともに作品自体も綺麗なイメージに満ちている。これが「遺書」というタイトルで納まっているところも夢のように感じられる。深町氏は行分け詩よりも散文詩の方が個性にあっているのではないだろうか。

奨励賞の浅見龍之介氏の「花の終わりの暴風雨」は、暴風雨の情景は丁寧に描かれているが、実際のテーマは暴風雨ではなく、それよりも混沌としたものだから、作品展開をもっとしなければならぬだろう。未消化で終わってしまったのが惜しい。

奨励賞の草野理恵子氏の「口」は、いつもの作品に比べると発想の変移が見られる。草野氏の場合は、大人しくかたまるよりも色々実験してみた方がいい。発想に描写が追いつかず過渡期にいるようだが、書いていくうちに覚えてくるものがあると思う。

奨励賞のnullcha氏の「Rabbitは感傷的に」は、痛患者である作者の事情は隠されているが、だからこそ、詩の言葉に読者はじかに感応できる。「掛け違えた」シャツのボタン。正そうと指をかければ、私は立派な大人になれた。読者も素直に共感でき、こうした表現には普遍性がある。



- 「私の履歴書」 泡沫恋歌
- 「耳なし芳一」 「送りバント」 「湖」 池山弘徳
- 「行雲流水」 「告白」 「四季」 橋本 青
- 「バステルソウル」 「蛍光的」 「氷の下のアイランド」 浅井かおり
- 「二月の風」 「今」 柿澤正志
- 「私はミノムシ」 「そして僕はまた明日も歩く」 「ころ」 根本夏実
- 「道程」 林 節子
- 「私は鞆の中に一匹のサンリを飼っている」 「初夏の風に」 波 ひろこ
- 「消光の日々」 「最期」 「命」 拓田 悠
- 「夜のこと」 「命名」 「空洞」 石原綾華
- 「39127」 「レイニーデイズ」 「星屑の海」 真海深匡
- 「銭湯」 「大地」 「紙」 小久保 謙
- 「ブラック炭酸水」 吉原煙也
- 「よなかのよだれ」 「可愛い女」 菊池泰明
- 「墮罪治ム、朽木紘（ス）」 千草ちとせ
- 「共鳴」 「風帽子」 「ひまわり畑の唄」 布目有里
- 「詩人宣言」 「素晴らしき日々の賛歌」 山本新次郎
- 「ただ歩いた」 「遠くの福音」 「暁降」 篁・霞流
- 「悼む」 浅野慈子
- 「きつりの庭」 「リサイクル」 「感情はバカじゃない」 久納美輝
- 「花茎」 「兄弟」 「同志」 梅下浩也
- 「見上げたら、ひま」 山中真優
- 「家族の肖像」 「春のバイエル」 平岡靖生
- 「消えない情景」 「そら豆」 「固執」 森川未月
- 「イマージュ」 「空白」 「環」 佐藤孝博
- 「千の交差点のなかで」 「新生」 「弦楽七〇億奏曲」 葛原りょう
- 「宙を書く」 中之島 潤
- 「反芻する」 「すべての九月二十二日に」 小木麻莉子



いがらし つとむ

言葉に何を託すか

五十嵐 勉

- 1949 山梨県生まれ
79 「流瀆の島」で群像新人賞
86 「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンター主催第1回インターネット文学賞
2002 「鉄の光」で文芸春秋賞
他に「ノンちゃん、NONGCHAN」「ワットプノムへ」「破壊者たち」など
評伝「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」

現代詩賞も一〇回を重ねた。この継続からか、ここへ来て入選・佳作から奨励賞レベルの作品数がひじょうに多くなり、厚みが出てきた気がする。応募数の増加に比例してのことは喜ばしいことだが、一方で逆に優秀賞と最優秀のトップレベルは、鋭さや激しさが鈍っている気がした。先鋭な言葉に胸を貫かれない、雷のような衝撃的言葉に脳髓を焼かれない、選考に臨むたびにそれを期待するのだが、そんな願望は叶えられないまま、不完全燃焼のくすぶりを今年もまた濃く残した。心臓を切られるような言葉には、なかなかお目にかかれないのが実際のところだ。どうしてでもそれを期待してしまうのも、また詩に対する夢でもあるだろう。これを持ち続けることは、また詩への憧憬でもあり、叶えられないままお縄り続けることだけは、執念でもあるだろう。今後も必ずそれが現れることを信じて、この賞の選考に臨みたい。

トップレベルに対する不毛感のなかでも、しかし日正士郎氏の詩作品には、内蔵された爆発力を感じた。解き放たれつつある光の矢を覚える。それは陶酔や酩酊と接した狂気に繋がる乱舞でもある。八方破れに見える放散力のなかに、現実を切り裂きめくり上げる意志がある。優秀賞だった前回の作品よりも、のめり込みは深く、放射力は鋭くなっている。その尖鋭力の深化は最優秀賞に値すると思った。このエネルギーを持続することは

醸し出している。この実感はずしりと響いてくるものがあり、海や断崖や波音や風音の荒れる情景を血の回顧として遡らせてくれる哀調がある。特に、「命からかたとん」はある闇を蔵した劇詩のような奥行きを示しており、不気味な詩空間を造形している。実話を想わせる素材は、肉親をめぐるドラマを造成していて、劇的な事件を背後に隠している不穏さを孕んでいる。言葉はやや稚拙だが、その奥行きを買って、優秀賞とした。

上田勝氏の「休耕田」は、表現の未熟さや足りなさを、視点の新鮮さが補って余りある。田や畑の休耕になって放置された地の嘆きを人間への問いかけで素材に増幅させた。難点も少なくないが、その純朴な視点に、実直な根がある。いま人間が振り返らなければならぬ、あるものを表出している点で、新鮮な眼を感じる。生活実感にプリズムの解析を与えて、現状を批判している。

奨励賞で衝撃的だったのは「見つかりやすいウォーリー」（森田有紀）である。不治の病との戦いをあつかんと叙述しながら死と生の深淵を言い綴る語群は、命の重みをひしひしと伝えてくる。そのはかなさと尊さを痛切に感じさせる詩だった。受賞決定前、すでに六月二十一日に肺がんの全身転移のために亡くなってしまったことを知らされ、さらに衝撃を受けた。命のかかった言葉の重みをあらためて実感した。いずれ文芸思潮誌上で発表したい。

命の喪失という点では「旅の途中」（遠藤芳子）も、愛息の突然の死への追懐が輝きを放って胸に食い込んできた。

「死体をタクシーに乗せて」（後藤大祐）も特異な設定の言葉に鋭さがあった。「死児のための玩具」「喰らう」（舟橋空鬼）は、鋭利な視点で安定した詩表現を示しているが、理屈や説明が型にはまっているのが、せつかくの設定を削いでいて、惜しまれた。

「ステロイド」（深町秋乃）は切れ込みの深さは力量を示している魅力に溢れているものの、変化球に頼る技巧が逆に本質を損ねている。真っ直ぐ表現することを心がければもっと内質に迫れるだろう。「口」（草野理恵子）は設定はおもしろく、意表を突くが、その意表に何を託すかが弱く、表現として空に巻き昇っていかない恨みがあった。一つの対決を得ればもっと鮮烈な結晶を得るものと想われる。「震度6弱」（町田理樹）は着想のおもしろさが勝って、思いの強さが沿っていない。これに何をこめるか、その

たいへんだったろうし、またこれをさらに保持して新たな創造に向かうことはいっそう荆棘の道を歩むことになるかもしれない。それらを含めての贈賞としたい。

詩は、つねに生身の戦いである。エネルギーが細くなれば、詩の力も貧弱になる。作品の創造は様々な条件に左右される。常時ベスト作品を生み出せるわけではない。生活や環境の渋滞で生み出す力はしばしば制約され、削減される。一方読み手は何もわからずに食欲にさらに高いものを要求する。それら乗り越えて一歩踏み出し、乗り越えていくことはきわめてむずかしいことだ。幸運にも恵まれなければならないかもしれない。前作よりもよいものを創り出すことの困難は、しかしそれでも持続の苦闘の上にはか花開かない。前回、前々回優秀賞だった作者たちが、それと同じもの、あるいはそれ以上の作品を生み出すためにどれほど苦勞し、挫折を重ねているか容易に想像できる。復活するには何度も挫折の苦澁を嘗めねばならない。奨励賞作品や佳作には、そういう試練の最中にある作品が少なくない。不死鳥のように復活し、結実の輝く翼を持って蘇ってくることを切望している。

今回優秀賞に上がった青木由弥子氏の作品は前回に比べ飛躍的に詩のイメージ世界が広がり、言葉の自由の翼で滑空している。日常が世界や自然や地球の生命力と繋がっている自由な結節を得たことで、言語空間が太く豊かに流れ出した。言葉のリズムや抑揚にも快いものがある。優秀賞にふさわしい結実を得た。三作ともよく、散文詩の「大地のしづくを得るために」あなたは百度も溶岩流に身を投じた」などの詩句は、魅力がある。なないろ氏の「アンドロメダ農夫」は、農作業と土の実感をとおして詩の言語空間を打ち立てようとする一貫した姿勢に、一つの開花が見られる。特に大きな前進が窺えるのは、社会や知識に対する懐疑を確立した点で、それが大地の確かさや自然の確かさを強固にしている。この基礎の上にしっかりと詩を載せていけばさらに詩の世界は広がっていくだろう。地や植物の実感のほうだが、社会の矛盾や騒音よりも優先することに気づけば、詩は確かに立脚点を得たのだ。それを大事にして、そこに怒りや憎悪や懐疑や哀しみを載せていけば、より豊かになる。若い世代にはめずらしく創作の「腰」を持っている人である。

後藤順氏は土地の匂いが染み付いた言葉を駆使して、土着生活の重みを思いを深くしてほしい。力のある人だけに、飛躍を願う。「毀れていく」（大西久代）は言葉に込められた力に強いものがある。このままの研鑽を続けていけばいつか開花しそうだ。

詩に何を託すか。命の重みか、世界への叫びか。矛盾に満ちた人生やこの世への抗議か。死に瀕したものの魂の救済か。希求を乗せた美しい言葉への陶酔か。すべて可能ですべて正しい。いずれにしても詩作はあなたの命の行為だ。その行為の前に立ち上がってくる世界。しっかりと闘ってほしい。



選考会風景

ことばことばことば
ことばでうまるものならばいくらでも
こわれたじゃぐち みたいに

花

ものやおもふとひとのとふまでむかしはおもはざりけりもみぢのにしきかみのまに
まにうしとみしよぞいまはこひしきなこそながれてなおきこえけれやくもしほのみもこ
かれつつちくしよおしんじまったおわつちやつたことばなんかいらぬちくしよいらな
いはなよりほかにしるひともなししづこころなくはなのちるらむひとこそみえねあきはき
にけりきらきらしすぎてきらきらしすぎてうるさいはるもあきもなつもふゆもめぐつては
るもひとにはつげねあまのつりふねいっそのこといっちゃんえばいつてもどらなければさし
もしらしなもゆるおもひをことばでうまるものならうめてしまえすきまなくでないとき
まからおとがするたえられぬおんがくがおんがくがきこえるとどかないならおんがくを
やめるなんのためにきかせるしろきをみればよそふけにけるおわつてしまつたうたはいら
ないつづかないうたなんかもやしちやえけふこのえにほいぬるかなはなそむかしのか
にほひけりはななんかみたくないそんなものにゆさぶられたくないこころをこころどこ
にあるのかぶわわしたふたしかなきもちわるいやつしりたくなかつたこんなふうけいあ
ることをしらなければまんどくしてたみていられたしおぶることのよわりもぞするわが
みよにふるながめせしまにちらつとながめておわるのかぼくのうしろのうすつぺらなどみ
のみたいなすうせんすうまんのもういないのちのかげみんなやけつくようなかわきをも
つてたはずなのにいまはいちようにおだやかなちゆうとはんばなほほえみでみんなちがつ
てたのにおなじかおにみえてそれがおそろしいそれがこわいほくもきえるのそのいちぶに
なるのかおのないやつらがいうこわくないよってそんなのしんじられるかこひぞつもりて
ふちとなりぬるいづこもおなじあきのゆふぐれほんのうなんですよってどっかのぼーずが
ゆうしかたないんですよほらこととしてのいのちはそれはそれでひつようじゃないですか

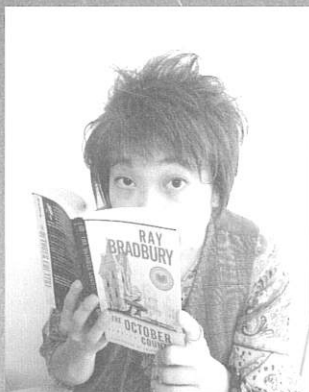
日疋士郎

んどうりよくがすすむためのそれがすぎたらすこしはかんがえなきやねいのちのぜんたい
とかせいめいってやつきりかえようよみんなやってきたことですわがたつそまにすみぞめ
のそでかみのくがねえかみのくが無えさきにつづくゆいいつつづくかもしんないふせきが
なにもねえことばのりずむをきいてるとまけそうになるくじけそうになるゆだねそうにな
るあのうたうたがおんがくがくがしのないやつゆだねそうになるちくしよしろきをみればよ
ぞふけにけるひとしれずこそおもひそめしかひとにいられてくるよしもがなひとつてそん
なにだいいかたがだいいじこわねがだいいじこころがだいいじなんだよこころつてきもちわる
いさわれないおんどもないにおいもやあらかさもことばをなくすこえをなくすすがたをな
くすこころをなくすどれがいちばんかんたんかいまはひかりをひかりをひかりをそれがの
ぞめぬならことばことばでいいこのやみをよるをなんだかあつとうてきにこうごうしいお
んがくをうちやぶるなまなましいso・onをそうおんを!!!あさほらけありあけのつ
きとみるまでに……だれかつづけてだれかつづけてだれか……ああこのうただってちがう
じゃないかひむかしののにかぎろひのたつみえてひさかたのひかりのどけきはるのひにあ
いまわかつたはなはるひかりそのなかにかなしみがないんじやないってことそんでわかっ
たあきをとゆふぐれそのなかによるこびがないんじやないってことおれはそんなふういき
りすてきりとしてわらえるきがしなくてもしようがないからからっぽになつててをひろ
げるこころをひろげるそれっていみなくない?こころあてにやらばややらはつしものう
わあaaaaaaあああああああああああああああああああああああああああああああ
AAA AAAああああああああああああああああああああああああああああああああ
お

い
で
に……

受賞のいっぽ

…親友の長女Rちゃんの自死に遭ってから、作品づくりの姿勢がどっか変わってしまったようだ。しじゅう何かに急ぎたでられている、何かが囁く。(で)のときの最高の仕事を心こめてしろ、でない(と)でない(と)の先は知らない、が心こめての仕事はきついい。五月末に現代詩賞に三篇を投じるとき迷いがあった。(これ出しちゃってだいじぶか? あまりにナマナシク自分の核心をのつけてないか?) 怖かったが結局投じた、いま出せる最高の作品だったから。(これが全く評価されなければ、今の自分には力が足りんということ、だ。) うち一篇を、この九月の四年ぶりの復活公演の劇中、引用した。(投じたことを途中まで忘れてた!) 詩と芝居は現代では全く別のジャンルだ。見せ方も異なる。デフォルメされた台詞として舞台で口にされた瞬間、それはフィクションになる、活字の抽象性も題材の具体性も剥奪されて別の物語のなかに紛れる。聖と俗の逆転、その中で作者は、僕は安全なのだ。…受賞の電話があったのは、誕生日の前日、劇場入りの二日前であった。なあんというタイミング! 公演も受賞もいさな奇跡の連続である。奇跡の連続が僕を追い詰めてゆく、喜びと、ふたたび、恐怖と。もう安全地帯はない。隠れるべきクローゼットはない。だったらそのとき最高の仕事をしよう、心こめて、でない(と)……



日疋士郎

ひびき しろ

2001年、病を得て化学メーカー退社。数年に及ぶ療養の日々。2004年、療養半ばに無職にて、十年以上中断していた演劇活動を再開。演劇集団「ぶろじえくと☆ぶらね」と旗揚げ。のち学習塾講師としてアルバイトから勤務開始。

2006年より、エッセイ『神楽坂逍遥』200回超にて連載中。(メールマガジン「週刊神楽坂ニュース」(けやき舎))

→ <http://archive.mag2.com/0000187031/index.html>

2010年四月以降、諸事情で公演活動休止を余儀なくされる。休止中、インターネットを通じて日記のように書き続けていた詩作を見直すようになる。詩の投稿をはじめ。

2013年、「文芸思潮」現代詩賞奨励賞、佳作を経て優秀賞。

2014年九月、四年のブランクを経て、朗読公演に続き演劇公演に復帰。『Here Come The Angels!』(東京都日暮里・d倉庫)作・演出・出演。劇中に詩『星待ち(カムアウト)』を一部引用。

◇ぶろじえくと☆ぶらねと→ <http://propla.pl.bindsite.jp/>

話した

考えてしたことだけとでそのことで深夜怖くなった
次がみえない忌み嫌われるのはおそろしい地図はない描かなければならない図形得意じゃないんだひとつの名前しかおもいつかなくて呼んでもたぶん聞こえなくても呼んでこれだけひとを苦しめるのだから眠れないのはその罰だ誰も幸せにできない体液で窒息する組成は殆ど海水だ海だらけの細胞こんな海のなかになんかいられない空をくれひとつでいい暗くてもいい!

…窓を開けると
…闇は無かった

ひいやりと植物とオゾンの匂い
震えが止まった
体温調節だったのか
水から空中へ浮上するための

すであかるむ東の空藍色
まばゆいおおきな金星

そこから天頂めがけて弓を射る角度に木星
結んだ線を二等分する距離に
なんてことだペテルギウス

夏のおわりなのに巨大なオリオンが昇ってくる
地平線近くにそのまま下ろすとシリウス
すっげえこれもなんてすらすらとした

三角形

星待ち—カムアウト—

こんなに大きな
おきっぱなしで誰のだろ
もう
ヒトではだめだ
つたえることができない
ことばかりがからまわり
どんだん真実から離れていく

叶わないなら天使になりたいな
ひとを幸せにするのはたのしいだろう
千年くらいかかるかな
それでは遅いんだいまじゃなくっちゃ

星がうすくなる
もう
見えない
朝焼けの紅色の雲
もういちど三角があるはずの空を
なぞる

さらっとした
海っぽくない
涙がながれた

日疋士郎

翼

くだもの

海がふくらんでいく
うずくまっていたものが
ゆつくりと足をのびし雄叫びをあげる
通り過ぎる気配だけが野を吹き抜け
押しよせる透き通ったかたまりが
私をのみこみあふれ流れ

かろうじてつかんだぬるい体温は
灰となって指の間からこぼれ
私はからっぽの水槽
ひとりふるえている

あなたの芯で生まれ直す種の
守られている場所は熟れて朽ちて
くずれていく肉の甘さ

のみこんだ種が芽吹き始める
ひしめきあい押しつけあい
やがてひとつだけが のびて のびて
私を内から突き破り
指先から萌えだす若葉
かずらとなつてからまりゆく黒髪の前

白い枝が肌を裂いて
ひろがりながら天をおおう

真昼の木漏れ日を糸に紡ぎ
織り上げていく一枚の布
舞い落ちる葉を織りこみ
実りを搾りその汁で染め
大地を横切る茜色の川に
織り上げたものをさらす
私の喉をうるおし
身をやしなうあなたの果肉が
天をおおう枝の網目にたわわに実り
夜を埋め尽くして輝いている

星の光があかく降り注いでいる
露に濡れた草の葉先が
風にゆれている

青木由弥子



受賞の言葉

震災後、名付け得ない焦燥感に襲われる日々が続いた。学生時代に従妹が自死した時、リルケのオルフォイスに救われた日々を想い出し、夢中で詩を読み始めた。その頃、新聞の特集で「文芸思潮」のことを知り、ベルグソンの思想の可視化を試みた作品を応募、佳作を受賞したことが、詩を本格的に学び始める契機となった。

詩の世界への扉を開いて下さった「文芸思潮」と、顕彰して下さい下さった方々に、心から御礼を申し上げます。

朝を告げる

踏みつぶされる前に
卵を地に埋めてしまおう
大地は熱を溜めこんでいるから
まだ生まれぬ私を温めてくれる

空を刺す固さで
告げる声が必要なのだ
太陽が岩を溶かしながら
地にめり込んでしまう前に
飛び立たねばならない
空に貼りつけられた月を
鋭い爪とくちばしで
引きはがすために

かつておまえは
大空を引き裂いていた

餓い慣らされる日々
忘却こそ 罪だ

海は涙で出来ていると
泣くことを知らぬ者が言う
私は産み
そして食い尽くす

見てはならぬと命じたのに
皮を脱ぐたびに
おまえの目が開く

闇は助けにはならない
おまえの目が燃え落ちる前に
私は喉を開く

- 青木由弥子 あおき ゆみこ
- 1995 学習院大学文学部哲学科(美学美術史) 修了
 - 98 早稲田大学大学院文学研究科(美術史) 修了
 - 2005 幼児のための絵画教室「絵夢(えむ)」開室(2010年3月閉室)
 - 12 第5回下松手づくり絵本コンクール(布絵本部門) 佳作
 - 第38回 現代童画展 入選
 - 第8回「文芸思潮」現代詩賞 佳作
 - 第3回「文芸思潮」イラスト(表紙絵部門) 奨励賞
 - 2013 第6回下松手づくり絵本コンクール(絵本部門) 佳作
 - 第39回 現代童画展 入選 第24回 伊東静雄賞佳作
 - 第9回「文芸思潮」現代詩賞 佳作
 - 第22回「詩と思想」新人賞 入選

アンドロメダ農夫

かつては頁をめくることができて出来たわたしがいまは牛の頭よりも役立たずだ
(いつかの教室でxもyもイコールが正義でないことを知っていた)

滲みやすいわたしを履歴書に置き忘れていたことも忘れたまま

回り続けるアンドロメダに農夫は種を飛ばしたんだ

百姓であるわたしは「耕す」を濫用してもよいのです

糞土…いやしいものたえ わたしはとても嬉しくなった

細い糸で下半身に根を張った もぐらの住みかと同じになった

「だけど刈田でバタフライはできない」

ネパールでひろった小石にも同じ事が書いてあった

(白菜一枚一枚でかくす比喩のしかたをみまもりたい)

(じぶんの根もとに埋まっているのだからを探してあるく虹になりたい)

あのと書きいた作文の一行とおんぶするはのおもさは同じでしょうかと問いかける

わたしはわたしであるはずのかたちをコンフレクの内沈めて

ぼんやりと浮かぶ波紋に汚点だらけの背中に重ねたりなんかしない

他人にあたえられた筆圧は鬼畜だったけれども時折、

「トマトよりも熟したゆびで握ってみたい言葉がある」

わたしはわたしのテリトリーに帰省する

なないろ



なないろ
1986 岡山県北の農家に生まれる
第7回現代詩賞優秀賞受賞
第9回現代詩賞奨励賞受賞

くるみの手で母さん 父さん肥やしになって 待ちくたびれたよ

なにかに傾けばなにかが埃をかぶる夕暮れを証明するのです

腹のなかには砂埃と数匹の耕牛と父祖たちを身籠っており畜生の網膜までも

たどりつけるように蛙の背広をすこしだけ拝借くだらない杵から半歩はずれてみる

(オルタナティブはきれいに整列しているというのに)

進化論はごちゃごちゃして居場所がない)

バーコードを通すとき産地が表示されるならよろしい、

ふと古本に絡まっていた静脈に懐かしさをおぼえたり分娩室でおんなのですよと

叫ぶ声に北風は容赦ない

黄色く濁っていて松脂と混ぜて埋めたきのうは余白に収まりきらずに除菌の泡で

落とされる

残高も皮下脂肪もいまは寝息を立てているから

吐息すら受信できない夜をハロー、

自然を装って緑色のカーディガンを着ましたわたし容疑者です

地面を装って2度まで下がりコーヒー牛乳の泥水か雪かどちらか

春になったというのにわたしのパーカーには啓蟄のきざしもない

受賞の言葉

この度は、わたしの作品を優秀賞という素晴らしい賞に選んでいただきまして、誠にありがとうございます。

思いがけない受賞の知らせにただただ驚いています。毎年芽吹いてくる自然の植物のエネルギーは眩しく、

どうしても何か書き残しておきたいという気持ちになります。土を耕すように、少しずつ詩の楽しさを味わっていきたいです。

この受賞を励みに、これからも詩を書いていけたらと思います。本当にありがとうございます。

命からかたとん

後藤 順

朝の光が生きものの気配を消す
ひとが生きるために作った
ため池が悠然と水をはる
あかい光にハヤが小躍りする
ひとはどこから目覚めるのか。

ぼくは弟を背に
鼻水が首元にたれても
母にならった子守唄を弱々しく歌っても
「にいちゃん にいちゃん……」
ひとつの言葉はとともぬくい。

父は日雇いに今日もでたのか
母は草取りに早朝からでたのか
塩辛いにぎり飯をふたつ残して
二歳の弟を抱くぼくは
小便の臭いを幾度もかぐ。

弟の手のひらの中の
トンボの眼玉には十以上の空がある。

生きものが明日の用意にいそしむ
ひと気のない夕暮れははやい
まだ帰らぬ親をまつ
ぼくの横で眠る弟が
眠るぼくから
薄い影を残して消えた。

でんでん虫といっしょに
ため池に浮かんだ弟
「はよう泳がんか はよう……」
ぼくが叫べば叫ぶほど
水の底の水が流れる輪廻に
弟は静かに沈んでいったのか
いっばいの水が
母の乳であればいいものを
未決囚のぼくが残される。

どれほど死ねば
弟よ 死ぬあとから
おまえはついてくるのか
死をつめた風船が
闇の中の闇を確かめ
水鳥が悲鳴をあげて飛び去る

忘れることで生きられる
父が椿の落ちる姿を覚えてくれている
ため池が
今でもぼくを沈めるのだ。

いのちとは
ひとひらの花神の水なのか。
「もういいよ もういいよ……」
池の底からこだまする
弟がぼくの包帯をほどく声は
聞こえてはこない。

ゆつくり生きて
いのちを遊ばせたふりのまま
五十年などあっさり過ぎた
どれほどのいのちなのか
からから かたかた とんとん
ぼくは今日もふり続ける。



後藤 順
ごとう じゅん
1953年生まれ
自由業
日本現代詩人会所属
参加詩誌「ひょうたん」
詩集「ぬけ殻あつめ」ほか
岐阜市在住

受賞の言葉

このたび、優秀賞に選んでいただき、嬉しく思います。選考された先生の皆様には、心より感謝するしだいです。

二年ほど前から、毎日文章と格闘する生活を送っていますが、自分の能力に限界を感じるたびに、それまでの自堕落な無思想的な給与生活者であったことを猛省しております。

詩とのつきあいを再考したのは、五十歳を過ぎてからでした。自問を含めて、抒情詩への誘いに己を浸す時、命を感じる歓喜を味わうことができました。

これまで多くの先達の詩集を読み、その詩編にどれほど感動したことか。しかし、いまだに、自分だと言える詩が書けない。詩集を上梓しても、心の中に表現できない残骸がありました。

今回の受賞を機に、あらためて自分の詩を見直そうと決意しました。本当に、ありがとうございます。

休耕田

上田 勝

れんげ草の花々に

みつばちの群れ

(それから先は)

うすべにいろの 「おぼろ河」

微睡に描いた 「一枚の風景」

カサカサ ザワザワ

風 騒ぎ

「時」「時」の風を 宥めたつもりで

日々だけが

ふわり ふわりと 軽やかに過ぎてゆき

いつとはなしに

うすべにいろの 柔らかな衣

剥がされて

(日々だけが 軽やかに過ぎてゆき)

いつとはなしに

「キユウコウデン」

「痒い！ 痛い！」

風に混ざって

「ヒューヒュー ヒューヒュー」

(孤児の悲鳴って こんな音 立てるのかしら?)

「ヒューヒュー ヒューヒュー」

(また一人 村を出ていく若者の 苦悶の声?)

(アノ人の 落胆の声も混ざってる?)

むずむず むずむず むずむず むずむず

(働きづめで 老いてしまったトラクター

錆を被って眠りこけてでもいるのかしら?)

(日々だけが 軽やかに過ぎてゆき)

微かに 蜜蜂の羽音

乾涸びてしまった絵の具の底を震わせて

うすべにいろ 蘇らせるだけの力無く

遠くに浮かぶ

モノクロームの「おぼろ河」

風に混ざって

(ガサガサ ガサガサ)

なけなしの わたしの血を巡って

茅どもの鬩ぎ合い 軋る音

汗 だくだくの

「休コウデン」?

陽の光

塵の糊に繋がれた

茅の葉並みに弾かれて

葉先のあたりを撫でるだけ

蓮華草ノ花花モ

蜜蜂ノ群レモ

トラクター駆ツテ

酸素ヲ恵ンデ戴イタ

アノ人モ

遠イ 遠イ 影法師

母なる大地の掌から

独り―零れ落ちて

全身に 隙間ないほど

茅どもの針 浴びせられ

受賞の言葉

枯れてゆく、言の「葉」に埋もれそうになりながら、青き「葉」を想う。時折、私の想う「葉」に重なる活字に触れてほっとする。荒れ野から差ししてくる光が、鋭く「青」に煌きながら突き刺さってくることもある。ペンを執る、徒に泳がせているだけの日もある。こんな日々、舞い込んできた受賞のお報らせ。御選考に携わって戴きました皆様方、誠に有り難うございました。

蓮華草ノ花花モ
蜜蜂の群レモ
トラクターノ アノ人モ

—影法師—



上田 勝 うえだ まさる
1964 早稲田大学文学部国文科卒業
広告代理店(ラジオ、テレビCM制作)、洋画フィルム配給会社を経て、建築資材製造会社勤務(定年まで)
詩作を始めたのは、高校時代以後、創作活動には空白の時あり、舞い戻りの時期ありの繰り返し
定年を機に再開、現在に至る
第8回「文芸思潮」現代詩賞佳作
第9回「文芸思潮」現代詩賞佳作